

---

# せいいていさんがんばって！

えいせん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せいいていさんがんばって！

### 【Nコード】

N5694Z

### 【作者名】

えいせん

### 【あらすじ】

その男、転生する。帝王の力をその身に宿し。その女、前進する。哀しみを背中に背負い。その者、渴望する。このぬくもりと、あの『愛』を。これは、格闘ゲームの素晴らしさを説くお話（嘘）。これは、『帝王』の話。

ていおう！（前書き）

何一つ考えてないこの小説を開いてくれてありがとうございます！  
楽しんでもらえたらいいなー！

ていおう！

くそっ！

一体どうなってやがるんだよおい！

いつものように村に『お邪魔』して食いもんを貰って・・・あわよくば女も頂こうかなんて俺達は思ってた。

なのに・・・これは一体どういうことなんだ！？

「何やってんだよお前ら！こんな奴らにてこずりやがって！」

「む、無理だよアニキ！こいつら、いつもと違う！」

村人達が俺達に抵抗してきたことなんていくらでもある。

だけど、俺達が今まで生きてこれたのはそんな奴らを力でねじ伏せて来たからだ。

「くそ！？なんだよこいつら！？う、うわあああああつ！！！」

また一人、仲間が死んだ。

「俺達の村に入ってきたやつて！死んでしまえ！」

「な、なんなんだよ！」

純粹な強さで言えば俺達が確実に強いだろう。

俺達は賊だ。

俺達の方が圧倒的に経験を積んでいる。

村人達の中では今まで人を殺したことすらない奴だって少ないうだろう。

なのに、俺達を押されている。

「ハアアッ!!」  
「ぐえっ」

一人、俺達の誰よりも強い女がいる。  
腰まで届く紅い髪。

俺達と大差ないほどの長身で、鋭い目。  
力強い印象を与えるその風貌で、俺の仲間を次々となぎ倒してい  
く。

この女の槍によって俺の仲間は何人も死んでいったが、この女に  
俺達が劣勢になるほどの力はないだろう。

どれだけ強かろうが、所詮一人で出来ることには限りがある。

俺達がここまで劣勢に立たされているのは恐らく、たった一つの  
こと。

・・・俺達は、村人達に恐怖を感じている。

この村の雰囲気、異質だった。

村人の一人を殺す。

そうすると、どんな村でも足が震え、逃げ出す奴が居た。

なのに・・・この村はどうだ!?

怒りに顔を歪ませて、次から次に突っ込んできた。

片腕を失くせば、もう片方の腕で。

両足を失くせば、両腕で首を締めあげて。

両腕を失くせば、その体で仲間の壁になり。

正気の沙汰じゃねえ！

足が震える？

震えているのは俺達の方だ！

俺達は人間だ。

人間ってやつは、恐怖って感情がある。

人を殺す恐怖ってやつは、俺達だって感じてる。

それを俺達は殺し続けることで、感じないように思わせているんだ。

それでも、死ぬ恐怖ってもんは誤魔化そうって思っても出来るもんじゃない。

出来たらもうそれは人間じゃない。

・・・鬼だ。

こいつらは人間なのか？

傷つくことを躊躇わず、自分が戦えないと悟ると仲間のために命を張り。

これが、ただの村人だっていうのか！？

村『人』なのか！？

あり得ない、人間の出来る事じゃない！

こいつらは、まるで・・・！

「ヒツ・・・！？」

なんだ、この女・・・

肩で揃えられた銀の髪。

さっきの女よりは小さいだろうが、すらりとした体。

その体を、漆黒の服で包む、絶世の美女と呼ぶに相応しい容姿を持った女は、防具の一つも付けずに、こっちへ歩いて来る。

見ようによつては天使が降り立ったようにも見えるかもしれないが、俺には悪魔にしか見えなかった。

殺気の一つも感じられないその女の目には、俺たちなど視界に入つてすらいなかった。

「俺達には帝王様がついているんだ！負けるはずがないんだ！」

「何？帝王だと！？」

帝王。

そうか、こいつが帝王か。

ということは、あの女は『陷陣営』か。

たった二人で賊を潰してまわっていると聞いたことはあるが・・・この村に居やがったか。

ツイてねえ・・・ツイてねえが、二人さえ潰せばこの村の奴らだつて、ビビって逃げ

「ふむ。・・・貴様ら、かかってくるがいい」

目が、あつた。

たったそれだけで・・・俺は、殺された。

格が、違う。

足が、手が、動かない。

凜としたその声が俺の体を侵食していく。

圧倒的な力の差を感じ、俺の体は震えるということすら放棄したようだ。

「こぬのならこちらから行くぞ！」

物凄い速さでこちらに近づいてくる姿をなんとか目で捉えるが、体は一向に動かない。

その手で道を阻む仲間を蹴散らしていく。

それを見て俺の頭は警告を全身に伝えていくが、肝心の体は反応すら返してくれない。

気がつけば、俺は血を吐いていた。

痛みすら感じずに、ただその不快感だけを認識して、急に意識が遠のいていく。

ツイてねえ。

村人が異常だったのでは無かった。

この女の、帝王の覇気が異質だったのだ。

・・・本当に、ツイてねえ。

俺は、倒れるという最後の仕事のためにようやく生き返った体に鞭を打ち、後ろを向いた。

自分を殺した相手と思えないほどに美しい『帝王』の背には、何故か哀しい漢が視えた気がした。



ていおう！（後書き）

うちの帝王はEボタンカラーです。  
あなたの帝王は、何カラー？

続く・・・続くのか？

はじまり！（前書き）

次はトキか！ラオウか！

ジョインジョインジョイン

ジョイントキイ

はじまり！

転生。

もし自分が転生できると聞いた時、皆はどう思うだろうか。  
夢のような世界へ行けることを喜ぶのか。

不思議な力を得ることに涙するのか。  
それとも、今までの世界から消えることに悲しむのか。

俺か？

俺はもちろん、喜んだよ。

「本当に俺が転生するのか！？」

「本当だ。私が嘘をつく意味がない」

急に大きな声を出した俺を呆れた様な目で見る男。

赤と黒の派手なスーツに身を包んでいる、ということしかこれと  
いった特徴のない男。

今の状況的に、こいつが神だと思っんだが・・・影が薄いな。  
服の派手さに負けてるよ。

「君のような反応をしてくれる方がやりやすい」

「そうなのか？」

「泣かれたりしたらこっちも困るんだ。時間がかかるからな」

「確かに」

「そんなことより、だ。君もわかっているだろう？なんの特典も付  
けずに送れる訳がないということを」

男がそう言うと、何もない空間から漢字が沢山書かれたスロットが出て来た。

「そのスロットを回してくれ。その内容に沿った特典をあげようじゃないか」

「内容？」

「そうだな・・・例えば『頂肉体』が出たとして。その世界での人類最強の肉体を手に入れる。他にもスロットの字次第では架空の技や力を手に入れることも出来る」

非常に夢が膨らむ内容だ。

「まあ、全てがスロットの字で決まるから・・・『無能力』なんてのが出ることも」

「えっ？・・・え、えっ！？」

「スロットだぞ？スロットは博打だ」

「ちよつとちよつと！特典くれるんじゃないの！？え！？」

「それはまあ、能力がないのが特典になる訳で・・・『超不幸』とかよりはマシだと思えば」

「その『超不幸』とかになつたらどーすんの？どーすんのよ！？」

「まあ、運命だと思ってくれ」

と、いうことは・・・弱くてニューゲームなんて最悪なことも起こるかもしれないのか。

・・・もとのせかいにかえりたいよ。

「まだスロットを回してないから落ち込むこともないと思うが」

「そうだよね！いいの出るよね！」

「知らん」

果てしなく不安になる気持ちを抑えて、スロットを・・・回す！  
何が出るんだ？

聖？聖なる力的な？

帝？聖帝になるの？

王？聖帝王ってなに？

「良かったじゃないか。大分良い特典だぞ『聖帝王』は」  
「そうなの？」

「ああ、架空の能力をもらう訳だからな」

架空の能力か・・・  
聖帝で帝王・・・

ん？んん！？

「もしかして・・・」  
「そうだ。あの聖帝だ。・・・格闘ゲーム仕様だがな」

それってどうなの？  
喜ぶべきなのか悲しむべきなのか・・・

「微妙な顔をするな。あのゲームのバランスがおかしいだけだ。十分強力だよ」

なら強いのか。

良かったークソみたいな特典じゃなくて！

いやまあ、病人の方がいいなーとかちよつと思ったりもしたよ。でも、十分強いらしいしもう満足だね。

うん。

良かったークソみたいな特典じゃなくて！！

「良かったークソみたいな特典じゃなくて！！」

「運が良かったじゃないか」

やっぱり声に出して言うべきだね！

「世界は・・・恋姫の世界に行ってもらっ」

おお！

チート特典で大暴れしてモテモテ生活！

なんてことも・・・いいじゃないか！

「容姿の設定も聞くが・・・望みはあるか？」

「そこはやっぱり・・・10人中9人が振り向くようなレベルの容姿が欲しいなと」

「わかった。そうしようじゃないか。」

キテる。

キテるよ！

俺の時代キテるよ！！  
モテモテ生活確定ですね！！

「お前のニヤついた顔を見てると何を考えているか手に取るようにわかるな。まあ、逝ってこい」  
「逝ってきます！！」

お父さん、お母さん。  
幸せになっ てきます！

世界から、一人、飛び立った。

前が見えない。

目を開けてないから見える訳がないんだけどね。

「あなた、これが私達の子ですよ」  
「おお！お前に似てとても可愛い子だ！」

「もう、恥ずかしいことを言わないで下さいよ！」

「本当のことを言って何が悪いというんだ」

「これが俺の孫、か・・・」

「そうですねお父さん。抱いてみます？」

「う、うむ・・・悪くないな・・・」

目を開けると、長身の男が俺を抱きかかえていた。

年齢50といったところか、洪さの漂うその風貌はさながら敏腕スナイパーのよう。

しかし、その目を真つ赤に腫らしてくしゃくしゃになったその顔は、孫の誕生を喜ぶ爺そのものだった。

「そうか、孫か・・・こんなに早く見れるなんてな・・・」

「お、お父さん！？どうしたの！？」

「いや・・・ちょっと目にゴミが入っただけだ。大丈夫だよ」

「そう・・・お父さん、ありがとうね」

「お前は・・・俺を泣かせたいのか？」

目から涙を溢れさせた俺の爺さんのその横で、俺の親が仲良く笑って見つめていた。

その笑顔を見ていると、前の親を思い出してしまう。

碌な親孝行もせず、半ば家出のように一人暮らしを始めた。

最後に見た両親の顔は、寂しそうに笑っていた。

俺は才能という奴に恵まれていなかったが、それでも俺の頑張りを評価してくれた。

俺が生まれたとき、今の親のように笑っていたのだろうか。

俺が居ないと知って、どうするんだろうか。

そんなことを思うと、何かこみ上げてくるものが。



気がついたら、俺は大声で泣いていた。

「お、おい！？いったいどうすればいいのだ！？」  
「お父さん、落ち着いて」

お父さん、お母さん。

『父さん、母さん』。

ここで幸せになります。

はじまり！（後書き）

主人公と両親の名前、どうしたらいいのか・・・  
帝王さんには哀しみを背負ってもらわないといけないし・・・

続け！

せいちょう！（前書き）

短い・・・

すごい文才おくれー！

せいちょう！

日記を、書こうと思う。

3歳になり、文字も少しずつだが理解できるようになってきた。でも、時々日本の文字が恋しくなってくる。

何故かこの世界は日本語で成り立っているけど、字は漢字ばかりで正直よくわからない。

だから、日本語を書く。

日本語で書けば見られても理解出来ないだろうし。

3歳になったけど、相変わらず平和だ。

この世界が三国志をモチーフにした世界だと忘れそうぐらいに。

そういえば三国志や恋姫、あと21世紀の科学、兵法の情報とかは記憶からごっそり抜け落ちてたけど未だに記憶が戻らない。

女がとても強い世界ってことぐらいしか覚えてないけど、神様が改変を恐れて何かしたんだろうか？

体が女だったのもびっくりしたけど、女が強い世界なら結果オライかもしれない。

体も少しずつ、だがしっかりと成長してきている。

と言っても、3歳だから絶世の美女な訳がないけど。

容姿を良くしてもらったのはハーレムを作りたかったからであつて、男にモテたいからじゃない。

大人になったら、男からの視線も増えるのだろうか。

・・・想像したくない。

どうせなら精神も女にしてくれば楽だったのに。

神様にもらった転生特典だけど、全くもって使えない。

聖帝の力を貰ったけど、それは経験や技術であって、体を鍛えな  
いと十全に発揮しないものだった。

一度、鍛えようと外に出てボロボロになって帰って来た時は両親  
に泣きつかれたので、もう少し成長するまでは自重しようと思う。

3歳の体で文字を書くのがここまで重労働とは思わなかった。

8歳になった。

中々に成長したと思う。

両親も喜んでくれた。

胸は無だけど・・・8歳だから別に大丈夫なはずだ。

流石に8年間もこの体で生きていると、愛着が湧いてくる。

しっかりと美しい幼女になったんじゃないだろうか。

最近、男の子からの視線をよく感じる。

稀に大人の視線も交じっていて少し・・・いや、かなり気色悪い。  
男には絶対にやらん。

・・・綺麗なお姉さんなら話は別だけど。

6歳から体を鍛え始めたけど、少しずつだけど効果が出てる・・・と思う。

何故か見た目に表れにくいので、よくわからないが、ムキムキの8歳幼女になるのも何とも言えないから、善しとしよう。

しかし・・・男口調なのと俺と言つのをやめると一々両親がうるさいのはなんとかならないのか。

まあ、自分の娘が男口調だったら少々アレだし、現実で俺と言う女は少しイタイような気もしなくはない。

でも、口調を変えると何か自分とは違う気がしてどうも落ち着かない。

特に父がうるさくて・・・そろそろ諦めて欲しい。

俺も、もう15になる。

絶世の美女にかなり近づいたんじゃないだろうか。

背もかなり伸びたし、何よりも男から言い寄られることが日常茶飯事になったことが、大分魅力がでてきた証拠だと思う。

男に恋愛感情を抱かないのは相変わらずだけど。

最近、帝王の力に体が追いついてきた。かなり嬉しい。

でも、まだ体に負担が掛かるようで、全力を出せるようになるの

はまだ先のようだ。

頑張れ、俺。

そろそろ口調のことは諦めてくれてもいいんじゃないだろうか。

せいちょう！（後書き）

オリキャラ、高順さんしか考えてないんですよー  
出してほしいキャラとか、教えてもらえないかな？（チラッ



はじめて！（前書き）

私の中二パワーを解放しても、この程度だといふのか・・・  
相変わらず文字数が・・・

はじめて！

きょう、はじめてひとをころした。

怖い。

だけど、それ以上に心地良い。

冷静になったとき、殺人の記憶に苛まれて動けなくなるのかと思っただけ、むしろ、村を守るために殺したことを感謝されたことで、気分が高まって落ち着かない。

正直、殺しているときは恐怖も躊躇いも何も無かった。

そんなもの、感じる訳がなかった。

村を守るために人を殺す。

今まで人を殺したことのない俺がそう出来たことを、勇氣ある行動だと両親に褒められた。

確かにそれは周りから感謝されるに値するものだったのかもしれない。

でも俺は、そんな格好いいことをしたと言える自信はなかった。何故なら、俺は笑っているから。

「賊だー！賊が来たぞー！」  
「なんだってー！」

突然この村を賊が襲ってきたと聞いたとき、俺は真っ先に出て行

った。

素手で戦えるのが俺だけで、特に準備するものもなかったから一足先に賊を見に行ってみた。

むさい。

この賊を表す言葉はそれだけで十分、そう思えるほどに息苦しい雰囲気だった。

「アニキ、この村はどんな女が居ますかねえ！」

「お前の頭ン中はそれしかねえのかよ・・・まあ、イイ女がいた方がキモチイイけどな！」

「アニキ、美味しいもん一杯食えるかなあ・・・最近、碌な食いもん食ってねえよ・・・」

「メシも女も手に入れて、さっさと帰るぞ。」

男、男、男。

見渡す限りの男。

遊びに行くような口で、男達は喋る。

辛うじて残っている記憶によると女の方が強いみたいだけど、まあそうとも限らないだろうし、何しろ実戦は初めてだから油断はしない。

遊びに行くような軽さで村を襲うつてことは、それだけ慣れてるのかもしれない。

「へっへっへっ・・・ん？」

俺に気がついたのか、賊の奴らは厭な笑みを浮かべながらこつちに近づいてくる。

「よう嬢ちゃん。迷子にでもなったのかい？」

「へっへっ……イイ女じゃねえか。これはこの村に期待せざるを得ねえなあ……」

気色悪い。

俺を厭らしい目で見てくる賊達。

何かが体を這いずるような感覚、嫌悪感。

この体になってから、男が苦手になった。

この感覚は、全く慣れない。

慣れない、とも思わないけど。

「お嬢ちゃん、おじさん達に何の用かな？もしかして、イイコトしてくれるとか？」

「イイツすねえ！俺、この娘好みつすわ！」

「俺が声を掛けたんだ。もちろん、俺が最初にシテもらうぜえ……！」

欲望に塗れた目を向けられて、理屈の無い精神的苦痛を感じる。

……よく我慢してる、俺。

「俺は村を守るために此処にいるだけだ。お前達の戯言に付き合う気はない！」

「なんだあ？正義の味方気取りって奴かあ？」

「いやー、カッコイイねえ！おじさん惚れちゃいそうだよ！でもさあ……武器も何もないくせに、何ができるって言うんだよ！」

苦痛しか生み出さない、耳障りな音が聞こえる。

……よく我慢しただろ、俺。

「もう喋るな。むさいんだよ、お前ら。さっさと死んでくれよ」

笑う。

その顔は多分、引きつってるけど。

「クソッ！馬鹿にしゃがつて、ヒイヒイ言わしてやるうじゃねえかよ！」

一斉に腰に差した武器を取り、襲いかかってくる。

怒りに顔を歪ませた男達が一斉に駆けてくるそれは、中々に面白い光景じゃないだろうか。

「クソがつ！オラアッ！！」

俺がクスリと笑うと、益々顔を赤に染めて、男の剣が振り上げられる。

斬るというよりも潰すことに長けたその剣は、当たれば確実に骨をやられそうだ。

俺は、この状況でも余裕なようだ。

少なくとも、こんなことを悠長に考えれる程には。

その剣は、ひどく遅く視えた。

その体は、ひどく脆く視えた。

その遅い剣を左手で捌く。

大きな大きな、昂揚感。

初めての実戦なのに、俺の体は何も変わらないらしい。

その脆い体を右手で貫く。

小さな小さな、不快感。

初めての殺人なのに、俺の心はあまり痛まないらしい。

俺が貫いた男は、俺の手から零れるように崩れ落ちた。  
その体と繋ぐように、俺の右手には糸が引いていた。

「嘘……だろ……」

何かが喋った気がしなくてもないけど、どうせ誰も喋らなくなるだろう。

笑う。

「フ……フフ……フハハハハ！」

その目は多分、笑ってないけど。

アレ？

おかしくない？

おかしいよね？

おかしいよね！？

「嘘……だろ……」

なんで、貫いてんだよ。

なんで、死んでんだよ？

「フ・・・フフ・・・フハハハ！」

なんで、笑ってんだよ！？

冗談・・・だよな？

人間の体を簡単に貫けるほど、素手は強くないはずだ。  
腹に一撃入れられたぐらいで、簡単に死なないはずだ。  
人間は、あんな風には

嗤えないはずだ。

そもそも、こいつは笑っているのか？

目を見開いたまま、只々笑い声を発し続ける。

狂ったように、笑い続ける。

こいつのこエを聞いているだけで、何かが抜け落ちていくような  
気がした。

「ひ、ひいっ！！？」

こいつの狂気に錯乱したのか、俺の仲間が一斉にこいつに襲いか  
かる。

俺たちは、捕食者だ。

民の命を喰らって生きる。

こいつはこの村の民だから、俺達が襲うのは当たり前のこと。  
それなのに、俺の体が叫び続ける。

これは、駄目だと。

気がつけば、俺の仲間はもう数えるほどとなった。

百人は居た俺の仲間、ほとんどが地に伏していた。  
生きている奴は居るのかと確かめようとして、やめた。  
居るはずがないから。

右腕以外何一つ汚れていない死神が、こっちを向いた。  
あまりにも美しく、ずっと見ていたいその姿。  
だけど、俺はこいつを見る訳にはいかない。

俺は、目を逸らした。

目が合えば、死んでしまう気がして。  
合わなくても、死ぬけれど。

どうせ死ぬなら、死神は見たくない。

とても強い人に助太刀された、ということにしておいた。

流石に、五分ほどの間に初実戦の俺一人で殺ったことがばれば、  
畏怖の視線に晒されてしまう。

良くて、異常者扱いか。

悪ければ・・・殺されるかもしれない。

苦しい嘘かと思ったけど、以外にすんなりと信じてくれた。

すごく、楽しかった。



体を鍛える努力をしたのは俺だから、この体は俺のもの。

だけど、体捌きや技、異常ともいえるほどの力は確実に俺自身のものじゃなくて。

転生者の恩恵としてこんな力を使って、まるで物語の主人公になったような感覚。

人を殺すこと自体が楽しかったのか、自分の力を見せつけるのが楽しかったのか。

或いは両方だったのか、俺には分からないけど。

でも、楽しかったのは、紛れもない事実。

そんな自分が怖くて。

何故か、心地良かった。

呼吸がしづらい。

体が痛い。

まだ足りない体で全力を出したから、しばらくは動くことすらできなと思う。

動けない言い訳を考えないと。

明日からの日々を想像して、少しばかり厭になるけど。

笑う。

その口は多分

きょう、はじめてひとをころした。

はじめて！（後書き）

チート能力持ったらやっぱり見せつけたくなってしまうんですけど  
私も無想流舞が使えたら移動が楽に・・・

早く哀しみを背負わせないと他キャラが一切出てこない・・・  
陥陣営っていつ出るの??

・・・一話目と繋げるのはまだまだ先になりそうorz

出て欲しい武将とか、感想に書いて頂けると嬉しいです。

苦しいです。評価してください。と書いたらどれぐらいの人が解つてくれるんだろう？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5694z/>

---

せいいていさんがんばって！

2011年12月20日15時51分発行